お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども お書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　王将殺人

昭和49年9月15日　初版発行
昭和49年9月30日　13版発行

著者　斎藤（さいとう）栄（さかえ）
神奈川県横浜市磯子区洋光台
6-35-8

発行者　五十嵐勝彌

印刷者　鈴木貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替東京115347　株式会社光文社　電話東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(榎本製本)
表紙の模様・意匠登録　116613
© Sakae Saitō 1974

(分)0-2-93(製)02256(出)2271 (0)

Printed in Japan

王将殺人

斎藤　栄

カッパ・ノベルス

目次

第一章　定山渓の対局　5
第二章　死の棋譜　19
第三章　陣屋騒動　32
第四章　謎の詰将棋　45
第五章　美しい姉弟　59
第六章　一文字の秘密　73
第七章　将棋と暗号　87
第八章　第二の犠牲者　101
第九章　針のない時間　114
第十章　父の犯罪　127
第十一章　燃えた棺　141
第十二章　過去を掘る　155
第十三章　死を運ぶ商売　169
第十四章　不幸な殺意　182
第十五章　骨と真相　197

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本文のイラストレーション

加藤孝雄

第一章　定山渓の対局

1

歩を振って、高井邦夫の先手がきまった。

「それではお願いします」

立会役を引き受けた森田英五郎八段の言葉を合図に、高井が7六歩と角道をあけた。

すべてがプロのタイトル戦そっくりの手順で始まった。が、むろん、さほど厳密なルールによる対局ではない。

高井邦夫は二十六歳のアマチュア五段。今年の全日本最強者戦に初優勝した輝かしい実績をもつ。北海道旭川市の出身だけに、この地元、定山渓温泉の「翠月」での一戦には熱がはいっていた。

対する相手は二十三歳の星純一。純一は年頭に、アマ四段に昇進したばかりだが、七月におこなわれた日東新聞主催のアマチュア王将を手中におさめ、天才青年の名が全国にとどろきわたった。

後手の純一も、3四歩と同じように角道をひらいた。

体重六十三キロという高井の堂々たる体軀に比べて、純一の小柄で少し蒼ざめた皮膚の感じが、どことなく神経質なものを思わせる。

純一は、横浜市立大学文理学部数学科の四年に在学し、解析幾何を専攻中であった。数学者に愛棋家が多いというが、論理的な思考の展開に共通点があるからだろうか。

■2六歩□4四歩■4八銀□3二銀……と指し手は、予定のようにすらすらと進む。

アマの全日本最強者と、アマ王将とをぶっつけてみたら、という企画をたてたのは、日東新聞と同資本系列に属する北海道道民新聞社だった。これまで北海道は、なんといっても田舎で、こうした趣味文化等の面での独自性が少なかった。それだけに、今回の行事は、まったく画期的なものだった。

この対局の講評役を兼ねた立会いに、日本将棋連盟から森田八段が出席したのも、棋道普及のために、必ず効果があると、連盟が判断したからである。

■5六歩と高井が五筋の歩を突いたとき、純一はなん

の躊躇も見せずに飛車を振った。
□4二飛
純一はこの振り飛車戦法で、アマ王将の栄冠を掌中にしたのだ。
「……」
見守る者の間から、軽い溜息がもれた。そこには、純一の父の星恵三の顔もあった。恵三は、昭和二十六年には、C級2組で順位戦に参加し、プロの四段にまでなった男である。事情があって、棋士を断念したが、それだけの棋力があるので、息子が何を考えているのか、手にとるようにわかる。
高井の精悍な頬に血の気がのぼった。
それを見届けたところで、恵三は席を立ち、庭の見える旅館のロビーにおりてきた。
「翠月」は、一級国道札幌虻田線から、少し山側にはいった場所にある。小さいが閑静な旅館だった。道民新聞の担当者が、
「ライラックのやど、とわれわれが呼んでいるくらい、時期には、うす紫の花が一面に咲いて、とてもいいんです」
と話していた。
恵三が庭先を見ると、すでに花期は過ぎたとみえ、むせるような緑の茂みのかなたに、青い水の色がのぞいている。
「翠月」の名物になっている二十五メートルプールが、庭先の一段低くなったあたりにあるのだ。
〝月寒の間〟でおこなわれている対局は、おそらく、午後三時過ぎまで続くだろう。持ち時間は、それぞれ二時間という約束なので、昼食一時間をはさみ、双方が、いっぱいに時間を消費することは想像にかたくなかった。
恵三は庭におりようと思い、下駄かサンダルを捜した。
そこへ、旅館の女中が駆け寄ってきた。

2

「星さまに、電報がまいっておりますが……。こちらでよろしゅうございますか？」
「あ」
と、恵三はわれになく声をあげた。
〈だらしない……〉
自分を叱咤したくなるほど、今日の恵三は心が乱れていた。息子の対局が気になるだけではなかった。

恵三は、電報をひらいた。激励の電報だった。宛名は、ホシジュンイチサマであり、

——ゴケントウヲ、オイノリシマス」エムエム

と、なっていた。

発信人の「エムエム」はローマ字のMMなのであろうか。

純一のファンに違いない。なんの変哲もないが、わざわざ、匿名なのが気にかかる。

アマ王将位についてから、純一のところへはファンレターが何通か来ている。なかには、明らかに若い女性のものもあった。このMMも、そのうちのひとりではないか。しかし、単にそれだけなら、匿名の必要はないのだ。おそらく、本人以外に知られたくない事情があるのだろう。

〈MM……〉

口の中で呟いているうちに、恵三には、ある人物の姿が浮かびあがった。決して好ましい連想ではないが、一番、真実に近いように思えた。

恵三は、電文を持ったまま、庭先をひと回りし、再び〝月寒の間〟へ戻った。

手数は、かなり進んでいるらしく、対局者を取り囲む地元の愛棋家たちの表情にも、熱いものが感じられた。

間もなく、昼食の休憩である。

記録を覗き込むと、□4二飛のあと、

——■6八玉□6二玉■7八玉□7二玉■9六歩□9四歩■5八金右□5二金左■6八銀□8二玉■3六歩□7二銀■2五歩□3三角■5七銀左□6四歩■5五歩□4三銀■5六銀□1二香■4六歩□7四歩■3七桂□4一飛■1六歩□1四歩■6八金直□6三金

のように、進展していた。

高井はここで2六飛と浮いた。

〈やる気だな〉

と、恵三が思ったとき、純一は平然と7三桂をはねた。

ここで昼食ときまった。腕時計を見ると正午になっている。双方とも序盤には、プロ並みの時間を消費していた。

「純一、電報がきているぞ」

恵三はさりげなく言って、電報を手渡した。

純一は、席を立ってからも、盤面を見おろしていたが、恵三の言葉に、われにかえったようだった。

純一はちらっと、「エムエム」の部分へ目を走らせ、すぐに背広のポケットに電文をしまった。クーラーが心

地よくきいているのに、彼は暑苦しそうに見えた。
恵三は、発信人の正体を知りたいような気もしたが、訊いたところで、純一が言いそうもないので、すぐ、その場を離れた。
ひとつには、倉西正文の眼鏡が、恵三を迫ってきたように思ったからである。
倉西は大洋生命保険の横浜支社港南支部長であった。港南支部は、恵三の家に隣接している。それで、恵三は個人的な交際もしているが、現在では、純一の後援会長みたいな格好になってしまった。そのために、今回も、定山渓まで自費で観戦に来たのだった。
親切な男だが、反面、その親切をおしつける強引さもあって、恵三はいささか、うんざりしていた。
昼食は「翠月」の大広間で、関係者一同が会食した。主催者側の、北海道道民新聞の寺門文化部長を初めとして新聞記者三名。日本将棋連盟からは森田八段と北海道本部の関係者。対局者の高井、星のほか、両者の関係者も一緒に、簡単な箱弁を開いた。
宴会は夜が予定されているので、昼はさして話も弾まなかった。
再開は午後一時。

昼食の間に、高井は意を決していたらしく、■2四歩と飛先を突き、□同歩に■4五歩□同歩■同銀と戦いを求めていった。
いかにも、強腕をもって鳴る高井の指しかたらしく、カサにかかって攻めこむ。以下、激しい攻防の応酬になった。
□5一角■4四歩□3二銀■5四歩□同歩■3四銀□6二角■3五歩□5五歩■同角□4四飛■5三歩□同角■4五桂□6二角■5三歩□同金■同桂成□同角■4四角□同角■7七桂□6五桂打■同桂□同歩■8六桂□6二桂
高井は自信たっぷりの手つきで、4二飛と打ち込む。途端に、純一は、指をしならせ、9九角成と、互いの敵陣に大駒が侵入する。□3二飛成、5一香、ここで、高井が2九飛とひいた。
この手は、飛車の活用をはかるとともに、高井が一局の勝敗を賭けたものだった。それだけに、観戦者は一様に〈はっ〉と息をのんだ。誰もがこの手を印象深く記憶したのである。まさか、後日、これがある殺人事件に重大な関係を持つとは、夢にも思わなかったのだ。
午後三時。

白熱の終盤戦が、秒読みの声に追われながら続いた。すでに両者とも、持ち時間はなくなっていた。

□5八香成■9九飛□5五角■9八飛□8八金■同飛□同角成■同玉□6八成香■8九金

別に、遺恨将棋ではないが、共に負けられない一戦だった。全日本最強者と、アマ王将と、どちらに軍配があがるかは、新しい試みだけに満天下の注目を集めているからだった。

ここで、純一は、6九飛と詰めろを敵玉にかけた。打てば響くように、高井は5五角を放った。これは見事な詰めろ逃がれの詰めろになっている。

純一は何か呟いたようだった。左手のハンカチを口にあてると、□9五歩をもってこれに応えた。9五歩も、また、詰めろ逃がれの詰めろである。しかし、この一手で勝敗ははっきり分かれてしまった。

■7四桂□同桂■7三角成□同玉■6四銀□8四玉■7五銀□9四玉■9五歩□同玉■7七角□8六桂打■同銀□同桂■同角□9六玉

「はい。それまでです」

高井は、純一の玉に詰みのないのを確かめ、悪びれずに投了した。104手で、純一はものの見事に、強敵をくだしたのである。

3

夜の宴会は、午後七時に始まった。

昼食とは、ガラッと趣きが変わり、広間にビールと酒が運びこまれ、寺門文化部長の挨拶の後、賑やかな宴がそれに続いた。

倉西は、純一の後援会会長格で、比較的上席にすわった。宴席が始まったころは、ただ単にいつもより機嫌がよく、舌の回転がスムーズだったに過ぎない。誰もそれを不審に思う者もいなかった。なにしろ、星純一は、遠征のかいあって、今、日本のアマチュア棋士ではトップであると、自他ともに許していた高井邦夫を撃破したのである。その後援者として、多少、いつもより、雄弁だったにしても、それは当然なのだ。

「……アマチュア将棋も、タイトルをたくさんつくって新人をどんどん、のばしたほうがいいですな。星君の登場は、その意味で価値がありますよ」

倉西は、寺門文化部長を喜ばせるような言い方をして、ひとりで座持ちの役を買っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「新しい企画が、新しい世代を生むのでしょう。これからは企画の時代ですからね。高井さんも星さんも、これは大変なライバルになりそうだ……」
寺門文化部長は、勝者敗者の両方に花を持たせた。
このころはまだよかったが、アルコールがまわるにつれて、倉西はしだいに自制心を失っていった。これは、酒を飲まない純一の目には、ひどくだらしない男のように映った。
星純一の父、恵三は、倉西の隣りにすわっていたので、本来なら、恵三が調子を合わせてやるべきだったかもしれない。そうすれば、倉西の脱線は適当なところで終わったに違いないのだ。が、恵三は、そうする気にならなかった。
「……森田先生はどう思いますか？」
宴が半ばを過ぎたとき、不意に倉西は、森田八段に食ってかかるように言った。
「え？」
森田八段は、酒のために真っ赤になった顔を倉西に向けた。森田八段は、高井を非常に可愛がっているので有名だった。プロ・アマの相違はあっても、人さまざまで、どうしても好みはでる。
「星君ぐらいになれば、プロの高段者と角落ちでどうです？　私は大丈夫、指せると思いますが……」
「指せるという意味はいろいろでしょう。高井さんは飛車落ちで、私と一勝一敗だったから……」
森田八段は、婉曲に、倉西の主張を否定した。それが倉西には気に入らなかった。
「しかし、それは星君の場合には参考にならないですよ、同じように見えても、得手不得手はあるし……」
倉西は、語気荒く、執拗に自説をまげなかった。
座の空気が不穏になったのを知ると、寺門文化部長は、「それなら、いっそ、森田先生との角落ちも、うちの新聞で指していただきましょうか？」
などと、強いて笑顔をつくり、妙にとげとげしくなった二人の間をとり持とうとした。
けれども、弾みのついた倉西の舌鋒は鋭くなり、しまいには、若いころの森田の話などを持ち出し、素行を非難するような調子になっていった。
「……森田先生はこれまでも、非常に自由な……言ってみれば勝手気ままな生き方をしてこられた。だから、星君のように、生真面目な青年に反発を感じられるかもしれませんな……」

倉西に、皮肉な調子で言われ、森田は顔面を紅潮させた。
「反発……そんなものはありゃせん。アマとプロを一緒にしたような喋り方は、やめてもらいましょう」
「いや、こちらは正論を吐いているんですよ。そうでしょう？」
「何が正論ですか……くだらぬ比較論に過ぎん……」
森田八段も、素面のときは実に立派だが、深酒をすると、人が変わったようにだらしがなくなる欠点があった。
二人がやりとりしている間、星恵三はほとんど口をはさまなかった。
口論が納まるキッカケをうしない、まず森田八段が宴席を中座し、間もなく、倉西自身も退席した。
たまたま、二人とも定山渓に泊まらず、札幌市内の「札幌ダイヤモンドホテル」を予約してあったのだ。
この騒ぎで、宴会の最後は流れ解散のようになってしまった。

4

純一は、この夜の出来事を、かなりはっきりと覚えている。後で、刑事たちから幾度も訊かれたために、しだいに記憶が確かになっていたせいもあるが、なにしろ、純一はビールを少し口にしただけで、ほとんどアルコールを飲んでいない。
まして、森田八段と倉西との、いささか根にもったような気まずい口論が、自分に端を発しているだけに、そのときの状況は、よく記憶に残った。
彼はいわば主賓なので、宴の最後まで席を立てなかったが、決して、愉快な気持ちで過ごしたのではない。
父の恵三が、その場のとりなしをするかと思ったのに、どうしたわけか、ほとんど口を開かないのだ。
そればかりか、森田八段と倉西が、相ついで席をはずすと間もなく、
「ちょっと、裏のプールのほうへ行ってくる。頭が痛い……」
と、純一にささやきかけ、櫛の歯が欠けるようになった宴席を、かまわずに出ていってしまったのだ。
時刻は、午後八時二十分ごろだった。純一は腕時計を見るともなしに、確認していた。
宴の後、純一は父と一緒に泊まる予定の〝藻岩の間〟に行ったが、恵三は部屋にいなかった。ロビーに戻り、

カラーテレビを観ながら煙草を吸っている高井邦夫と、しばらく雑談した。
純一は、高井に勝ったものの、彼の豪快な指し手は好きで、むしろ、尊敬に近い感情を抱いていた。
「なんだか、久しぶりに疲れてしまった……」
と、高井は上気した顔に笑いを浮かべた。こだわりの気持ちは、少しも感じられなかった。相当に酔っているのがわかった。
「明日はどちらへ？」
純一は訊いた。北海道在住の高井は、別に観光地巡りでもないだろうと思ったのだ。
「ここまで来たんだから、オロフレ峠を越えてみますよ。あそこへは行ったことがないので……」
「オロフレ峠？」
「登別の北側の山で、近くに弁慶温泉というのがあるところです」
しばらく、そんな会話を交わした後、星明かりの庭へ、純一は夜露を踏んでおり立った。
浴衣の袂には、恵三から受け取った電報がはいっている。
〈エムエム……〉
森田真理子……。
純一は、つぶらで感情のこもった真理子の瞳を思い起こした。父親同士が、古い友人でありながら、何か遠い過去に、深い心の傷を持っているような気配が察しられて、二人の交際はどちらの父にも知らせていない。
だから、真理子は父の森田八段に気づかれぬように、頭文字の激励電報をうってよこしたに違いない。
高井に勝ったことを、すぐに東京へ知らせてやりたい気もした。しかし、電話口へ出るのは、おそらく、真理子の母だろう。それは純一にとって好ましくなかった。
庭下駄をはいた純一は、プールサイドへの小道をおりていった。
「……裏のプールのほうへ行ってくる。頭が痛い……」
恵三は、そう言い残している。
部屋にいないのだから、多分、プールサイドで、夜風に吹かれているのだろう。しかしもうかれこれ、小一時間にはなる。
〈一体、どこにいるんだろう？〉
純一は、ゆっくりと、二十五メートルプールを見おろす。プールサイドの土手まで行き、下を覗いた。
プールは三方を、金網のフェンスで囲み、こちら側だ

けは、斜面を利用した階段状の観覧席と土手になっている。

プールの四隅に輝く螢光灯を反射して、水面には、かすかな光の影が漂っていた。

一組のカップルが、プールサイドにすわりこみ、二人とも両足を水につけながら、肩を寄せ合い、何か喋っている。話に熱中していると見え、純一の出現にはまだ気がついていない。

恵三らしい人影はどこにもなかった。

〈おや……いないな。どうしたんだろう?〉

疑念が湧いた。

こんな狭い旅館である。庭とプールを除けば、人目につくところばかりであった。さりとて、旅館を出ても、この時間では行く場所もない。

わざわざ「プールのほうへ行く」と断わったのも解せない。

〈訊いてみるかな、あのアベックに……〉

ちらっと、そんな気持ちが動いた。黒い二つの点になっている彼らは、きっと一時間も前から、このプールサイドにいたに違いない。もし、恵三が一度でも来たのなら、目にとまっただろう。

が、結局、純一はそれをやめた。

その理由は、説明できるものではなく、ある種の予感からであった。

そればかりか、純一はこの後、妙な行動を起こした。

観覧席の一番はずれに行き、螢光灯をちょうど逆光に受けるような位置に立ち、庭下駄でポンと小石を蹴った。

小石は、硬い金属性の音を立ててコンクリートの上に落ち、ころころところがった。男女が、驚いたように視線をあげたとき、二人の視野には、旅館の浴衣を着た純一の背中が見えた。その影は、もう、何時間もそこで涼んでいたように、草むらにすわりこんで動かなかった。

5

国鉄札幌駅前から大通公園のあたりにかけて、立派なホテルが林立している。ホテル・ニューサッポロ、グランドホテル、パークホテル、富士屋ホテル、サッポロホテルなど、冬季オリンピックを境にして、部屋数もふえた。

三吉神社に近い、西七丁目に聳える札幌ダイヤモンドホテルも、そうした新築ホテルのひとつである。

倉西が、定山渓の「翠月」から戻り、このホテルのフ

ロントで部屋鍵を受け取ったのは午後九時三十分だった。
気持ちは、わけもなく昂ぶり、八つ当たりしたいような思いに駆られ続けた。
エレベーターで八階へのぼる。エレベーターは二カ所にある。倉西がおりたほうは、八階のサーヴィス・ステーションから離れていた。鍵を使い、ドアをあける。ドアは、自動錠になっている。
シャツを脱ぎ、ズボンもとる。
それから、ふと思い出してシングルベッドの枕許にある電話機に手をのばした。
〈いないかな？〉
と思った。
ダイヤルする前に、腕時計をちらっと見た。三千代には「十時半か十一時ごろにならないと戻らない」と言ってある。
ホテルの室内電話は、交換手を通さずに、直接、相手の部屋番号をダイヤルすれば通じる。
706をダイヤルして、受話器に耳をあてていると、呼出し音が聞こえているが、誰も電話に出ない。
〈どこかへ買い物にでも出かけたんだろう……〉
三千代は買い物の好きな女だ。派手な性格の女はたいていそうだが、ほんのわずかな隙にも、デパートや専門店へ顔を出す。必ずしも、高価な品を求めるというのではないが、あまり使いもしない西陣織の財布や、帯止めなどは、しょっちゅう手に入れてくる。
おそらく、倉西の帰りが遅くなると思い、外出したあげく、どこかの喫茶店でアイス紅茶でも飲んでいるに違いない。
小野三千代との交際は、今月の四月からだった。
三年前に妻を亡くしてからは、三千代の前にも、幾人かの女性と関係をもった。しかし三千代は一番若いし、なによりも、派手で陽気な気性が、自分にぴったりのように思えた。
近ごろでは〈この女と再婚してもいいな〉と、内心、考えるときもある。
本当は、同じ部屋のダブルかツインを予約して、そこに泊まりたかった。が、倉西がそうしなかったのは、世間体もあるし、会社の上層部に妙な噂が広がるのをおそれたためである。
大洋生命保険の横浜支社長である青田敏郎は、つねづね、
「わが社の財産は、社員の信用にある。私行については

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com